

2026/09/25

ICMRBS 2026 参加報告書

東京大学大学院 理学系研究科化学専攻 博士後期課程 1 年 澤田侑大

この度、日本核磁気共鳴学会 2026 年度第 1 回若手研究者渡航奨励金のご支援を賜り、2026 年 8 月 23 日から 27 日にかけてスイス・ダボスで開催された ICMRBS 2026 に参加いたしました。貴重な機会をご支援くださった故京極好正先生、故阿久津政明様ならびにご家族の皆様、日本核磁気共鳴学会関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

ICMRBS 2026 は、磁気共鳴を用いて生命科学研究を展開する世界各国の研究者が集う国際会議です。参加者には NMR を用いたタンパク質研究に携わる研究者が多く、小分子が生み出す超核偏極を利用して ^{19}F MRI の感度向上を目指している私にとっては、普段とは異なる研究分野に触れ、多くの刺激と着想を得る貴重な機会となりました。

中でも特に印象的だったのは、タンパク質研究において ^{19}F ラベルが想像以上に幅広く活用されていたことです。これまでもその存在自体は認識していましたが、多数の講演を聴講することで、その応用範囲や研究上の重要性を改めて実感しました。タンパク質研究は私にとって専門外であり、理解が十分でない部分も多くありますが、 ^{19}F 核という共通の観測対象を介することで、分野を越えた議論が可能になりました。タンパク質を深く理解しながらも感度の制約によって観測できない現象を抱える研究者と、水系で ^{19}F 核を高感度に観測する技術を開発している私との間で、今後の研究展開にもつながり得る非常に有意義な議論を行うことができました。

自身の研究についても、多くの研究者から貴重な助言をいただきました。今回私はフラッシュトークとポスター発表を行いました。応募時には深く意識せずフラッシュトーク付きの形式を選択していましたが、実際に会場を訪れると非常に多くの聴衆を前に発表する機会であり、緊張感のある経験となりました。一方で、フラッシュトークをきっかけに研究へ関心を持ち、「発表を聞いてポスターを見に来た」と声をかけてくださる研究者も多く、研究内容を物おじせず積極的に発信することの重要性を改めて実感しました。

研究内容については、当該分野を長年牽引し、以前から交流のある University of Wisconsin-Madison の Silvia Cavagnero 氏とも綿密な議論を行うことができました。また、CIDNP に関するポスター発表を行っていた研究者の多くが博士課程の学生であり、国籍や所属機関は異なるものの、今後それぞれが独創的な

研究を展開し、CIDNP 研究をさらに発展させていこうという意識を共有することができました。世界各地から CIDNP 研究者が集まる ICMRBS 2026 だからこそ得られた、非常に貴重なつながりであったと感じています。

もちろん、専門分野の異なる研究者とも積極的に交流し、自身の研究をより広い視点から捉えるための議論を行うことができました。また、発表時間外には、各国における博士課程での研究生活や研究環境について意見を交わすなど、研究を越えた交流も深めることができました。また、ポスター発表では MDPI Biomolecules Poster Award を受賞しました。

さらに、ICMRBS 2026 への参加後には、本学会のオーガナイザーである University of Basel の Sebastian Hiller 氏の研究室を訪問し、研究ディスカッションや実験装置のセットアップに参加しました。その後、Ulm University の Sabine Richert 氏の研究室を訪問し、今後予定している共同研究について 1 対 1 で詳細な議論を行いました。さらにドイツ・ゲッティンゲンで開催された HYP26 に参加し、口頭発表を行いました。

今回の約 4 週間にわたる欧州研究滞在では、研究室訪問のアポイントメントを自身で取るところから始まり、実際に複数の研究グループを訪問し、自身の研究を発表するとともに、多様な専門を持つ研究者と議論を重ねました。研究成果そのものだけでなく、自ら研究者とのつながりを構築し、分野や国境を越えて研究を発展させていくことの重要性を実感できたことは、今後の研究者生活における大きな転機になったと感じています。

今回得られた知見、人的交流、そして研究に対する新たな視点を、今後の研究活動と成果へと着実につなげてまいります。

改めまして、このような貴重な機会をご支援くださった故京極好正先生、故阿久津政明様ならびにご家族の皆様、日本核磁気共鳴学会関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。



ダボスの風景。美しい自然に囲まれた環境の中で、リラックスしながら研究について思考を巡らせることができました。